

香取遺産

小見川城と 粟飯原氏

vol.184



▲空堀と土橋



▲赤橋付近の空堀

小見川城は、利根川の西側に面した標高約40mの台地の先端に位置しています。伝承によれば、千葉一族である粟飯原朝秀が建久年間（1190～1199）に築いたと言われています。そして、戦国期を通して、小見川の地を粟飯原氏が統治していました。

構造は、曲輪が連なるように配置された連郭式です。開発により多くが失われていますが、北側の城山第2浄水場に隣接している部分で土塁や空堀が良好な状態で現存しています。また、堀には横断する通路として設けられた土橋があります。1人がやっと渡れる幅で、敵の進入路を直線的かつ限定的にすることによって防御力を高める工夫がなされています。また、城山公園の中央にある赤橋が架かる部分も空堀が残されています。

永禄年間（1558～1570）に安房の勝浦城主であつた正木時忠が下総へ侵攻し、米ノ井城などを攻略しました。その際に、正木氏は仮の砦として橋向城（現、小見川中央小学校校地内）を築き、小見川城を攻撃しました。一時は攻略されますが、粟飯原氏の家臣であった、成毛氏が橋向城を落城させ、小見川城を取り戻したとする説があります。

天文18（1590）年の豊臣秀吉による小田原攻めでは、当主粟飯原俊胤は北条方に加わったため、小田原城と同様に、小見川城も落城しています。その後は、徳川家康の関東移封に伴い、小見川の地に松平家忠が入封しています。以降は、徳川家と近しい人物が当地を支配していきます。

これから季節は、遺構が観察しやすくなりますので、散策してみてはいかがでしょうか。